

## 世代をこえてながく歌われる童謡

**福田** 渡辺先生は、今の子どもの歌、つまりテレビで歌われているような歌についてはどう思われますか？

**渡辺** 好きか嫌いか、ということだけ考えるなら、好きではないんです。

昔の歌は、世代をこえて歌われましたよね。ところが今の歌は、そのとき限りのものが多い。「あ、めずらしい、おもしろいな」とは思うんですが、そのときだけで、じーんとこない歌が多いように思います。現代におけるひとつの流れと考えれば、それはそれでいいのかもしれないかもしれませんけれど。

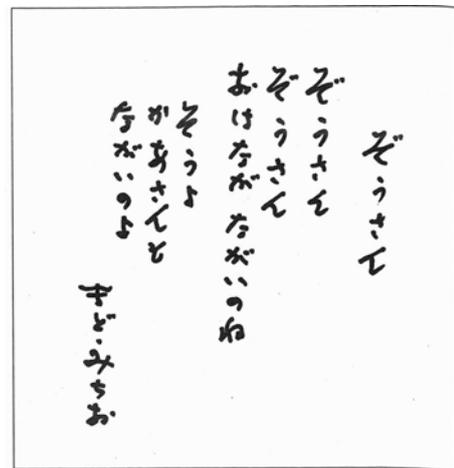
ただ、歌が「2、3年で歌われなくなる」というのは、子どもの心をとらえていないからではないか、と思いますね。

**福田** 安尾先生はどう思われますか。

**安尾** 今の歌は、童謡というよりも、子どもの流行歌といった方がいいと思います。爆発的に歌われるけれども、童謡としてあと何年残るか、ということになると疑問がある。おもしろいんですけど、結局心にしみいるような何かがないんです。

**小野** たしかに、「たきび」や「ぞうさん」のようにながく歌いつがれていくか、ということになると疑問が残りますね。

娘と孫が遊びに来ているんですが、生まれて5ヶ月の孫の「唯千香（いちか）」を抱きながら娘が「ぞうさん」を歌ってきかせていました。よく聞いていますと、1番を歌って2番の「ぞうさん ぞうさん だーれが すきなーの あーのね かあさんが すきな のよー」と歌い、同じメロディーで「唯千香ちゃん はだーれが すきなーの、そーね、かあさんが すきな のよねー」と気持ちよさそうに3番(?)を歌ってきかせていました。0歳の子と母親のあたたかいふれあいに「ぞうさん」の歌詞もメロディーもびたりなんです。「ぞうさん」の歌が愛される理由のひとつがわかったような気がしました。



まど・みちお氏 直筆の書

**福田** 人々に愛される歌には、何かがあるんでしょうね。

**小野** 童謡は、やはり心にひびくことが重要だと思われますか？

**渡辺** ええ、その要素は大きいです。童謡の歌詞にしても、メロディーにしても、伴奏にしても、いわゆる専門性よりも、心にひびくことが重要だと思います。子どもが好きだとか、子どもをかわいいと思うとか、そういう気持ちが前提にあって、はじめて童謡としての音楽性が生まれるんだと思います。いくらドレミファをしっかり覚えたって、それはそれだけの

ものですから。

**小野** 子どもへの愛情の方が大事ということですね。

**渡辺** 同じ音楽でも、なんというか、やわらかい、子どもの雰囲気をもった音楽の方が子どもには好かれますから。大人の感覚で作曲するのでは、子どもの心にはひびかないと思います。根底に子どもが好きだ、かわいい、そう思う心根が一番必要なんです。その上で、作曲する技術が必要になってくるんです。

**小野** 童謡の作曲には、才能も技術も必要だけれども、一番必要なのは子どもへの愛情なんです。詩を書く場合も同じことがいえますね。

**安尾** ぼくが「チューリップ」「うみ」などを作曲された井上武士先生のお宅におじゃましていたころ、井上先生は「今の童謡は童謡とはいえない。新しい童謡はとにかくリズムをむずかしくしたり、音程をむずかしくしたり、それから伴奏を技巧的に入れて、ピアニストがいないとひけないようなものをつくったりしてしまっている。童謡とはそういうものではない、童謡というのはとにかくメロディーだけで、子どもがおどり出すようなものでなくてはだめなんだ。」とよくおっしゃってました。

**渡辺** その通りですよ。子どもが歌える歌でなくては。

**安尾** いわゆる、ぱっと目立つようなメロディーというよりも、心にしみいるようなメロディーがいいと思います。音楽の原点というか、素朴で、子どもも大人も口ずさみたくなるような情操豊かな音楽だからこそ、世代をこえて歌われるんだと思います。

**福田** 「うみ」も「たきび」も「ぞうさん」も、素朴な、子どもの心に根ざしている歌なんです。